

聖凰学園羞恥王決定戦

～制服の下の秘密 密室LIVEシーズン2学園舞台でデ
スゲーム～

目次

第1話：転入生たちの秘密	4
第2話：歓迎という名の羞恥	13
第3話：白衣の下の羞恥	26
第4話：汗と技の羞恥祭	42
第5話：学力と羞恥の逆転劇	56
第6話：体育祭練習での力学変化	65
第7話：文化祭準備の関係性深化	80
第8話：修学旅行・温泉での序列確立	94
第9話：生徒会選挙戦での権力移行	104
第10話：期末テストの技術統治	115
第11話：卒業式準備・準決勝	125
第12話：学園王決定戦・最終章	149
あとがき	169

第1話：転入生たちの秘密

～聖鳳学園高等部 新学期～

春の陽光が聖鳳学園高等部の校舎に降り注ぐ朝、十二人の男たちがそれぞれ異なる思いを胸に学園の門をくぐった。名門男子校として知られるこの全寮制学園に、彼らは転入生として、あるいは新任教師として足を踏み入れる。

しかし、誰一人として知らない。この美しい学園が、再び彼らを地獄へと誘う舞台となることを。

朝の校舎 生徒会室

「皆さん、おはようございます」

藤堂颯真の声が生徒会室に響く。紺のブレザーを完璧に着こなした颯真は、生徒会長として新任教師と転入生を迎える準備を整えていた。肩幅を強調するブレザーの下で、鍛えられた胸板が薄く浮き上がる。モデルとしての経験が活かされた立ち居振る舞いは、制服姿でもその美しさを際立たせていた。

「俺は藤堂颯真。生徒会長を務めています。今日から聖鳳学園の一員となる皆さんを、心から歓迎いたします」

颯真の背後では、風紀委員長の中尾凌が無表情で書類を整理している。完璧に着こなされた制服は、まるで彫刻のような凌の体型を引き立てていた。薄い唇がゆっくりと弧を描く。

「面白そうな面々だな」

凌の視線が、集まった転入生たちを値踏みするように舐め回す。冷たい瞳が一人一人を観察し、内心で何かを計算している。

廊下 各自の教室へ向かう道

「ちっ、マジでお坊ちゃん学校じゃねえか」

神崎烈が制服の襟を緩めながら吐き捨てる。ネクタイを適当に結び、シャツの裾を出した着こなしは、この学園では明らかに浮いていた。しかし、その荒々しさが逆に注目を集める。廊下ですれ違う生徒たちの視線を感じながら、烈は不敵に笑った。

「ふざけんな。俺はこんな猿芝居に付き合う気はねえぞ」

その後ろを、対照的に佐伯慶が眼鏡を直しながら歩いている。制服を完璧に着こなした慶の姿は、まさに優等生の見本だった。細身の体型が制服に包まれ、知的な雰囲気醸し出している。

「論理的に考えれば、この状況は明らかに異常ですね。しかし、まずは情報収集が先決でしょう」

慶の冷静な分析の声が、烈の荒い言葉と対比を成す。眼鏡の奥の瞳が鋭く周囲を観察している。

美術室

水城玲央が静かに絵筆を走らせている。長い黒髪が制服の肩にかかり、その美しさは絵画のモデルのようだった。制服のブレザーが、玲央の中性的な美しさを一層際立たせる。

「ここでも、僕たちは見られているのでしょうか.....どうして、こんなことになったのでしょうか」

玲央の声は囁くように小さく、しかし確信に満ちていた。筆を持つ長い指が微かに震える。美しい瞳に影が差す。

美術室の隅で、白石悠が小さく震えていた。制服が悠の華奢な体型には少し大きく、袖から覗く細い手首が儚げな印象を与える。色白の肌に紺の制服が映え、まるで人形のような美しさだった。

「やめて……僕を見ないで……怖いよ……」

悠の震え声が美術室に響く。依存的な性格が表面に現れ、誰かに守ってもらいたいという願望が滲み出る。

「大丈夫だよ、悠」

優しい声をかけたのは文芸部の顧問を務める早乙女司だった。教師らしいスーツ姿で、生徒たちに安心感を与える存在だ。

「僕も状況が掴めていないが、君たちを守るために最善を尽くすから」

体育館

「よっしゃあ！久しぶりに体を動かせるぜ！」

大河原駿の明るい声が体育館に響く。サッカー部の主将として、すでに他の部員たちと汗を流していた。制服から体操着に着替えた駿の筋肉質な体型が、他の生徒たちの視線を集める。太い太ももが体操着のショートパンツから覗き、健康的な魅力を放っていた。

一方、バスケ部副主将の葉山蓮は、クールに練習を見つめている。長身の蓮が着る体操着は、その美しいプロポーションを際立たせていた。

「駿、少し落ち着け。ここは前の場所とは違う」

蓮の冷静な声に、駿の表情が一瞬曇る。

「そうだな。でも、蓮……俺たちはまた……」

「分からない。だが、警戒は怠るな」

保健室

黒崎仁が白衣を着て、医療器具の点検をしていた。三十代前半の成熟した男性の魅力が、白衣越しにも感じられる。広い肩幅と胸板が白衣を押し上げ、大人の男性としての存在感を示していた。

「生徒の健康管理が俺の役目だ。大丈夫だ、痛かったら言ってくれ……しかし」

仁の手が止まる。医療器具の中に、明らかに不自然なものが混じっていることに気づいたのだ。

「これは……体温計ではないな」

情報処理室

西園寺晴人が複数のモニターに向かっていて。情報処理部部長として、学園のネットワークシステムをチェックしている。制服がやや緩く着られた晴人の姿は、典型的なオタク系男子だった。

「待て、これはおかしい！学園のサーバーに不審なアクセスが……」

晴人の指がキーボードを叩く速度が上がる。画面に映し出されるデータに、彼の顔が青ざめていく。

「まさか、これは配信システム？しかも、隠しカメラの映像が.....うわああああ！」

音楽室

天音翔の美しい歌声が音楽室に響いている。元アイドルとしての経験を活かし、音楽部のエースとして活動していた。制服姿でも、ステージで培った美しさが際立つ。

しかし、歌いながらも翔の目は鋭く周囲を観察していた。

「アピールって、どんな？まさか、また.....」

翔の声が微かに震える。美しい顔立ちに、一瞬不安の影が差す。営業スマイルの裏に隠された闇が覗く。

放課後 校舎屋上

夕日に染まる校舎の屋上で、十二人が顔を合わせた。それぞれが学園での一日を過ごし、異常事態に気づいていた。

「皆さん、大丈夫か？気づいていると思いますが」

颯真が口を開く。生徒会長として、この状況をまとめようとする責任感が滲む。

「この学園には、隠しカメラが設置されています」

「やっぱりな」

烈が舌打ちする。制服を着崩した姿勢で壁にもたれかかり、その荒々しさが夕日に映える。

「僕が調べた限り、カメラは校舎全体に設置されています。寮の個室以外は、すべて監視下に置かれているようですね」

晴人が震え声で報告する。

「それだけじゃありません」

慶が眼鏡を直しながら言う。

「これは間違いなく配信されています。そして、視聴者は……」

「僕たちの姿を見て、楽しんでいる……」

玲央が静かに呟く。長い黒髪が風に揺れ、制服姿の美しさが夕日に際立つ。

「ふざけんな！ また同じことかよ！」

駿が拳を握りしめる。サッカー部の制服が、彼の筋肉質な体型を強調していた。

「駿、落ち着け」

蓮が冷静に制する。バスケット部の制服を着た長身の蓮は、この状況でも冷静さを保っていた。

「でも、蓮。俺たちはもう……」

「みんな……怖いよ……誰か助けて……」

悠が小さく震える。制服が華奢な体型には大きく、その儚げな姿が他の面々の保護欲を刺激する。

「大丈夫だ。人間の身体は柔軟にできている」

仁が優しく悠の肩に手を置く。大人の男性としての包容力が、白衣越しにも感じられる。

「俺たちがいる。君を守る」

司も頷く。教師として、生徒たちを守る責任を感じていた。

「でも、現実問題として」

凌が冷たく口を開く。完璧に着こなされた制服姿は、まるで氷の彫刻のような美しさだった。

「我々は既に檻の中だ。そして、視聴者たちは我々の反応を楽しんでいる」

「面白そうじゃないか」

凌の唇が薄く笑みを形作る。その笑みに、他の面々がぞっとする。

「おい、凌。お前まさか……」

烈が警戒心を露わにする。

「抵抗しても無駄だ。君たちも理解すべきだ」

そのとき、校内放送が響いた。

『皆様、お疲れ様でした。聖鳳学園へようこそ』

機械的な声が、彼らの背筋を凍らせる。

『本日より、特別授業を開始いたします。詳細は明日、第一回授業でご説明いたします。なお、本校の教育方針により、授業の様子は記録・配信されますことをご了承ください』

放送が終わると、屋上に重い沈黙が落ちた。

「特別授業……」

翔が美しい顔を歪める。元アイドルとしての経験から、この状況の恐ろしさを誰よりも理解していた。

「僕たちは、また始まるんですね……」

玲央の囁きが、夕風に流される。

「ああ」

颯真が拳を握りしめる。生徒会長として、モデルとしてのプライドが傷つけられることへの恐怖と怒りが入り混じる。

「だが、俺たちは負けない。前回だって……」

「今度は学園という舞台。逃げ場はより少ない」

「それでも」

颯真の目に決意の光が宿る。

「俺たちは生き残る。そして、この狂気を終わらせる」

十二人の男たちは、それぞれ異なる思いを胸に、明日への不安と決意を抱いて屋上を後にした。

制服姿の彼らを、見えない無数の目が見つめていることも知らずに。

そして、どこかの配信サイトでは、早くも「聖凰学園羞恥王決定戦」の予告が流れ始めていた。

視聴者たちのコメントが踊る。

『待ちました！学園モノ最高！』

『制服フェチにはたまらない』

『今度は誰が最初に脱落するかな？』

『生徒会長の制服脱がせたい』

『美少年悠くんが気になる』

十二人の男たちの新たな戦いが、今始まろうとしていた。

第2話：歓迎という名の羞恥

～聖鳳学園体育館 夜8時～

体育館の照明が暖かく灯る中、十二人の男たちが円形に座らされていた。机の上には学園の紋章が刻まれた酒瓶と、見慣れない薬品の入った小瓶が並んでいる。

「さあ、新入生歓迎会を始めましょう」

どこからともなく聞こえる機械音声に、颯真の喉が震える。生徒会長として着用している制服のネクタイが、急に窮屈に感じられた。

『本日の特別授業は「学園伝統・新入生指導」です。先輩による適切な指導により、後輩は学園生活への適応を図ります』

「ふざけんな！」

烈が立ち上がろうとするが、突然足に力が入らず、その場に崩れ落ちる。

「何だ、これは……」

慶が眼鏡越しに自分の手を見つめる。細い指先が微かに震え、体の奥から妙な熱が湧き上がってくる。

『先ほどお飲みいただいた飲み物には、軽度の筋弛緩剤と感度増強剤が含まれています。安全性は保証いたしますが、一定時間、身体は自由は利きません』

「薬を……飲まされた？」

悠の声が震える。華奢な体に回った薬の影響で、制服の下の肌が敏感になっているのを感じていた。

『それでは、学年順に指導を開始いたします。まず、一年生の白石悠くん、前へ』

悠の顔が青ざめる。立ち上がろうとするが、足がふらつき、結局は膝をついた格好になってしまう。

「悠……」

颯真が手を伸ばそうとするが、自分も同様に体の自由が利かない。

『指導役は三年生から選出いたします。本日は神崎烈さん、お願いします』

「俺が？冗談じゃねえ！」

烈が反発するが、体は言うことを聞かない。それでも無理やり這うようにして悠に近づく。

『指導内容：新入生の制服着用状況を確認し、学園生活に適した身だしなみへと修正してください』

「やめて……お願い……僕を見ないで……」

悠が震え声で懇願するが、烈の手が悠のブレザーのボタンに伸びる。

「悪い、悠。俺も……体が勝手に」

烈の指が悠のブレザーのボタンを外していく。一つ、また一つと外されるたびに、悠の色白な肌が露わになっていく。薬の影響で敏感になった肌に制服の生地が擦れるだけで、悠の体がびくんと震える。

「あ……やめて……みんな見てる……」

悠の声が涙声になる。ブレザーが肩から滑り落ち、白いシャツ一枚の姿になった悠の華奢な体型が明らかになる。胸元が薄く透けて、小さく薄いピンクの乳首が浮き上がって見える。

「綺麗だな……」

烈が思わず呟く。自分でも信じられない言葉だった。

『続いて、シャツのボタンチェックをお願いします』

「やめろ！」

颯真が叫ぶが、体が動かない。リーダーとして、モデルとしてのプライドが悠を守れない自分への怒りで燃え上がる。制服のズボンの中で、自分の陰茎が薬の影響で硬くなり始めているのを感じ、さらに屈辱を覚える。

烈の手が悠のシャツのボタンに触れる。悠の体が電気に打たれたように震える。

「感じすぎだ……薬のせいかな」

一つずつボタンが外されていく。悠の色白で滑らかな肌が露わになっていく。華奢で筋肉のない胸部、細い腰のライン、そして小さく薄いピンクの乳首が完全に露出する。

「うう……みんな見ないで……僕、おかしくなっちゃう……」

悠が両手で胸を隠そうとするが、薬の影響で腕に力が入らない。

『素晴らしい指導です。それでは、乳首の敏感度チェックをお願いします』

「そんなこと、できるか！」

烈が拒否しようとするが、体が勝手に動く。指先が悠の小さな乳首に触れる。

「ひゃあああ！」

悠が背中を弓なりに反らせる。薬の影響で極度に敏感になった乳首に触れられた瞬間、体の奥から電流のような快感が走り抜ける。

「嘘だろ……こんなに感じるのか」

烈も驚く。指先で軽く乳首を摘むと、悠の体がびくんびくんと震える。

「やめて……おかしくなる……颯真さん、助けて……」

悠の股間の制服ズボンが、徐々に膨らみ始める。14センチの小ぶりで美しい陰茎が、薬の影響で勃起し始めているのだ。

「悠まで……」

玲央が美しい顔を歪める。自分も同様に、制服の下で陰茎が硬くなっているのを感じていた。

『次の指導に移ります。下半身の制服チェックをお願いします』

「やめろおおお！」

悠が叫ぶが、烈の手がベルトに伸びる。ガチャリとベルトが外れる音が体育館に響く。

ズボンのボタンが外され、ジッパーが下ろされる音が、静寂の中で異様に大きく響く。制服のズボンが腰から滑り落ちると、悠の白いブリーフが露わになる。

「うわあああ……死にたい……」

悠の恥ずかしさは頂点に達する。そしてブリーフの前面には、明らかな膨らみが浮き上がっていた。薬の影響で勃起した14センチの陰茎が、ブリーフを押し上げている。

「感じてるじゃないか」

凌が冷たく観察する。完璧な制服姿のまま、氷のような視線で悠を見つめる。

「違う……これは薬のせいで……僕は……」

悠が必死に否定するが、体は正直だった。

『最終確認として、下着の状態もチェックしてください』

「そこまでは……」

烈が躊躇するが、体が勝手に動く。指先が悠のブリーフの腰部分に引っかかる。

「お願い……やめて……颯真さん……誰か……」

悠が涙を流しながら懇願するが、ブリーフがゆっくりと下ろされていく。

そして、悠の勃起した陰茎が完全に露わになった。

14センチの小ぶりで美しい形状、薄いピンク色の亀頭が露出し、透明な先走り液が既に滴っている。ほとんど体毛のない陰部が、少年らしい可愛らしさを際立たせていた。

「うああああ……みんなに見られて……」

悠が完全に裸になり、体育館の冷たい空気が全身に触れる。十一人の男たちの視線が、悠の裸体に注がれる。

『素晴らしい指導でした。では、次は二年生の指導に移ります』

「まだ続くのですか……」

慶が青ざめる。自分も既に制服のズボンの中で勃起していることに気づいていた。

『二年生代表、佐伯慶さん、前へ』

「僕が……」

慶の声が震える。眼鏡が汗で曇る。

『指導役は同学年から、中尾凌さんをお願いします』

「面白そうじゃないか」

凌が薄く笑う。完璧な制服姿のまま、慶に近づく。

「凌……君はまさか、楽しんでいるのですか」

慶が眼鏡越しに凌を見つめる。

「現実を受け入れているだけだ。抵抗しても無駄だということを、君も学ぶべきだ」

凌の冷たい指が、慶のネクタイに触れる。丁寧に結ばれたネクタイが緩められ、首元が露わになる。

「やめてください……僕は……」

「優等生の君がどんな反応を見せるか、興味深い」

凌の手が慶のブレザーのボタンに移る。一つずつ丁寧に外していく手つきは、まるで芸術品を扱うようだった。

ブレザーが脱がされ、白いシャツ姿になった慶の細身の体型が浮き彫りになる。筋肉質ではないが、引き締まった美しいライン。

「次はシャツだ」

凌の指がシャツのボタンに触れる。慶の体がびくんと震える。

「感じやすいんだな、慶」

一つずつボタンが外されていく。慶の色白で滑らかな胸部が露わになる。小さく薄いピンクの乳首が、薬の影響で既に硬くなっている。

「論理的に考えれば……この状況は……でも、体が……」

慶の声が裏返る。知的なプライドが完全に打ち碎かれる屈辱。

「まだ始まったばかりだ」

凌の指が慶の乳首に触れる。

「あああ！」

慶が背中を反らせる。薬の影響で敏感になった乳首への刺激が、体の奥まで響く。

凌は慶の反応を冷静に観察しながら、両方の乳首を同時に指先でつまむ。

「ひいいい！だめ……そんなに強く……論理的思考が……」

慶の体がびくびくと震える。股間の制服ズボンに、明らかな膨らみが現れ始める。

「勃起してるじゃないか」

凌が事実を淡々と指摘する。

「これは……薬の生理的反応で……僕の意味では……」

慶が必死に否定するが、16センチの陰茎が制服ズボンを押し上げているのは明らかだった。

凌の手がベルトに移る。慶のズボンが下ろされ、白いブリーフ姿になる。勃起した陰茎の形がブリーフ越しにくっきりと浮かび上がる。

「美しい反応だ」

凌がブリーフに手をかける。

「やめて……お願いですから……」

慶が涙目で懇願するが、ブリーフが下ろされる。

16センチの細めで美しい形状の陰茎が露わになる。亀頭は薄いピンク色で、既に先走り液で濡れている。色白な肌に映える美しさだった。

「ああああ……恥ずかしい……みんなに見られて……」

慶が両手で股間を隠そうとするが、凌がその手を掴む。

「隠すな。美しいものは見せるべきだ」

慶の勃起した陰茎が完全に露出し、十一人の視線に晒される。

『続いて、三年生の指導です』

機械音声が響く。

『大河原駿さん、前へ』

「俺かよ……」

駿の顔が赤くなる。サッカーで鍛えた体が薬の影響で熱くなっている。

『指導役は同学年から、葉山蓮さんをお願いします』

「蓮……」